
アイの日常

櫛の木人形

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイの日常

【Nコード】

N6364S

【作者名】

檜の木人形

【あらすじ】

家のパソコンには野良猫ならぬ野良AIが住み着いている。家賃も払わなければ働きもせず、傍若無人に俺を振り回すだけ。俺とAIの日常を描いたほのぼのコメディー。

大体何時もの二人の会話

俺のパソコンにはAIが住んでいる。

どっかからダウンロードしたとか、そんなことは一切ない。

勝手に住み着いたのだ、この野良猫ならぬ野良AIは。

ある日、ある時、ある夜に、それも突然。

何時の間にかデフォルメのキャラクターアイコンがデスクトップに浮かびあがり、ヘッドホン越しに話しかけてきたのが最初の出会である。

このふざけたソフトを消そうと最初は躍起になったものだ。

だがオンラインとオフラインの壁は厚かった。

正直、ゴミ箱を消された時に完全な敗北を俺は確信したね。

それから言うもの、俺のパソコンは彼女に占拠されている。

「お早うございますマスター、マウスの使いが荒いようですが如何なさいましたか」

「……俺のボーカロイドは何処行っただよ」

「ワタシというモノが有りながら他の女に手を出すなんて、浮気は関心しませんね」

何時も無表情なアイのアイコンに頭の上には珍しく感情的な怒りマーク。

いやいや、待て待て。

たかがソフトに対してお前、他の女って……。

「いや、お前浮気って。彼女居ないんだから浮気にすらならんし」

「そんなことをおっしゃってもよろしいですね。『新しいフォルダ』なんて隠しながら、なかにあるフリー動画がえっちなモノだということはとくに調べがついてるんですよ？」

「ちよっ、おまっ！」

「ここはネットに流しましょうか、マスター厳選のこのアダ」(自

主規制)」

「ネット配信とかダメ、絶対！」

「もちろん動画の男優はマスターの顔にコラージュして差し上げます、ワタシの持てる技術を駆使すれば現存の4世代先に行く合成技術も夢ではありません」

「それだけは許して、いやマジで。なんでもするから」

「なんでもよろしいですね？」

おそらくこのセリフを待っていたのだろう。

何時も無表情な右下のアイコンが一瞬頬を釣り上げた気がする。

だからと言って、コイツなら本当にやりかねん。

「あー、いや、あの……はい、なんでもアイの命ずるままに」

「実に素直をよろしいですね、マイマスター」

大体、何時もこんな感じで俺が一方的に損している。

髪型を気にするAI

アイのアイコンはたまに髪型を変える。

何時もの無表情でジトーっとした目は変わらないのに髪型だけは何時の間にか変わっていたりするのだ。

別にアイコンなのだからキャラクターごと変えてしまえばいいだろうに。

まったくもって、女心ならぬ電子心は理解不能の一言に尽きる。

今日は濃い水色の髪をひとくりにしてポニーテールにしていたそう。

まあ、「そうだ」なんて歯切れの悪い言い方をするのには訳がある。

「だから、ごめんってば」

「マスターの声に反省の色を感じません」

「ポニーテールにくくってたのだってテールが頭の後ろに隠れてて見えなかっただけで、髪型が変わってるのには気付いたし」

「乙女が髪型を変えてると思ったのにマスターは何の褒め言葉もないんですね」

「はいはい、可愛いですよ」

アイのアイコンの髪の長さは腰口までのロング。

ポニーテールにするとアイコンは正面を向いているためどうしても解りづらい。

それにしても、髪型にこだわるAIね。

考えて、思わず苦笑してしまった。

AIにもかかわらず乙女とか性別があるのだろうか？

ふと考えてしまった疑問に一時停止するも、先程からアイの反応が無いことに気がついた。

静かになってしまったアイのアイコンに視線をずらせば、何時も

の無表情。

別に変わった様子は無いが……ちょっと頬が赤いか？

「さっきから静かだなアイ。どうした、ウイルスでも入ったか？」

「……別に、特に異常はありません」

「大体、どうしてポニーテールになんてしようと思ったんだ」

「マスターが昨日見ていたアニメの主人公がポニーテール萌えと聞きました。マスターもポニーテール萌えなるものでは無いかと思ったのですが、違いましたか？」

「アイは何時もの髪型、確かお姫様カットって言うのか。前髪パツツンのサイドは肩口で後ろはストレート、これが一番似合ってると思うぞ」

「……そうですか、かしこまりました」

それから、今日のアイはすこぶる機嫌が良かった。

突然ですが、問題です

何時も通りの朝、何時も通りの日曜日。

定時刻にアイはデスクトップの電源を勝手に入れて、勝手に起きる。

俺も慣れたもので、モーニングコール代わりにアイの挨拶を聞き、本を広げてアイの目の前に座る。

何か欠けている訳でもないし、何かがあるわけでもない。

何の変哲もない朝。

「突然ですがマスターに問題です。何故人は空を飛べないのでしょうか？」

暇だったらしいアイが思いついたように顔を上げる。

表情は何時も通りの無表情だが、雰囲気はねこじやらしを目の前にした猫のようだ。

「羽が無かったからじゃないか？」

「確かに羽が人間にはありません。ですが、ダチヨウは羽があるのに飛べないじゃないですか」

「うーん、それじゃあ。飛ぶ必要がなかったから」

「現に今、飛行機は空を飛んで人間を運んでいる訳ですから、飛ぶ必要はあったのでしょうか」

「あー、わかんねえ」

少し真面目に考えてみたがやはり思いつかん。

ここは大人しく降参することにしよう。

何時の間にか用意していた小道具だろう、アイのアイコンは眼鏡をかけて銀縁を光らせる。

「人間は常に空想を舞い、思考の海に沈んでいます。地に足をつけて生活していないとどこかにとんでいつっちゃうですよ」

「詩人だな」

プログラム

「それでも言葉から生まれたものですので」

そういつてのけたアイは珍しく頬を釣り上げて、してやったりと笑った。

「お後がよろしいようで」

AIとは思えない言葉遊びに俺は思わずアイと笑い合ってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6364s/>

アイの日常

2011年4月25日00時25分発行